

わたしたちはだれもみな、社会におけるひととひと、また周囲の環境との関わりの中で生活を営んでいますから、その「世界」をどう認識するかということは、自分の生き方を大きく左右するものとなります。信仰というのは、やはり世界についての認識を左右する基準となるわけです。

そして世界に対するキリスト教会の態度には、大きく分けるとふたつあると言えるでしょう。ひとつは現世を悪の支配のもとにあると否定的に見て、物質的な世界から脱却して、救いに与るように説くタイプです。もうひとつは、何はともあれまず世界を受容して、社会に対する人間の使命を強調するタイプです。

聖書において、この世界という言葉が最も多く出てくるのがヨハネによる福音書ですが、ヨハネ福音書は、「3・16 神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という箇所などにより分かるように、社会を受容する後者のタイプだと言えます。

しかし、社会と何の軋轢、摩擦もないというわけではありません。「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい」(15・18)とあるように世はイエスの弟子たちとイエスご自身を憎んだのです。つまり、世を愛する神の愛と世が神に対して求めるところのものが一致しなかったのです。その

一致しないところ、神の愛と世の憎しみが交差する点に、イエスは立っておられたのです。

それではイエスに従う弟子たちは、どうだったのでしょうか？「15・19 あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。」とヨハネは続けるのです。弟子たちはかつて世に属していたが、今やイエスに選ばれて世には属していないのです。彼らもイエスとおなじく神の愛と世との間に立たされているのです。

そこで、苦悩するのです。しかし、その苦悩はイエスが苦しまれるのとは、少し違うようです。世に属していた時の追憶が自分を過去に引き戻そうとするのです。そして自分が選び出され、歩むべき道を見失うかもしれない戸惑い、困惑する中で苦悶するのです。世から自分を選び出し、旅を導く主、イエスはいったどこにわたしたちを連れて行くこうなるのか、そういう不安が増大してくるのです。

トマスはイエスに尋ねました。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である」と応えられたのです。すなわち、ご自分が完全に神と一致していることをあきらかになさったのでした。

フィリポは、トマスよりも問いを深めています。彼は

無自覚にも問題の本質を見極めていたのです。彼自身と神の意志の間に、充分な一致がない、ということなのです。だから「神を、示してほしい」(8節)と悲痛な思いを抱いて願うわけです。

イエスの答えは、「わたしを見た者は、父(神)を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父(神)をお示しください』と言うのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか(9〜10)」です。十字架を予期する場面でイエスは、ご自身によりすでに神を示しているのです。

エリ・ヴィーゼルによれば、アウシュヴィッツにおいて十人のラビたちが会議を開きました。：聖書において神は一日のうちに雄牛と子牛を殺すこと禁止、母鳥と雛鳥を殺すことを禁じた(レビ記22、申命記22)、どちらか一方を生かしておかなければならないからだ、あなたが鳥のためにわたしたちに命じられたことを、どうしてイスラエルのために命じられないのですか？ここでは父たちと、こどもたちが毎日毎日いっしょに殺されるのですから。三日に及ぶ会議の後にラビたちは神に有罪の宣告を下したのです。十人のラビたちは、この神への有罪宣告の後に口をそろえていいました。「さあ世界の主に祈ろう！」

神とイエスが完全に一致しているならば、十字架にかけられるイエスは、ご自分が死すことにより、神に有罪宣告することになるのです。裁きの神が死して、神が愛する世が生かされる、世に対しては、自らの自由意志で愛を選び取る道だけが示されるのです。